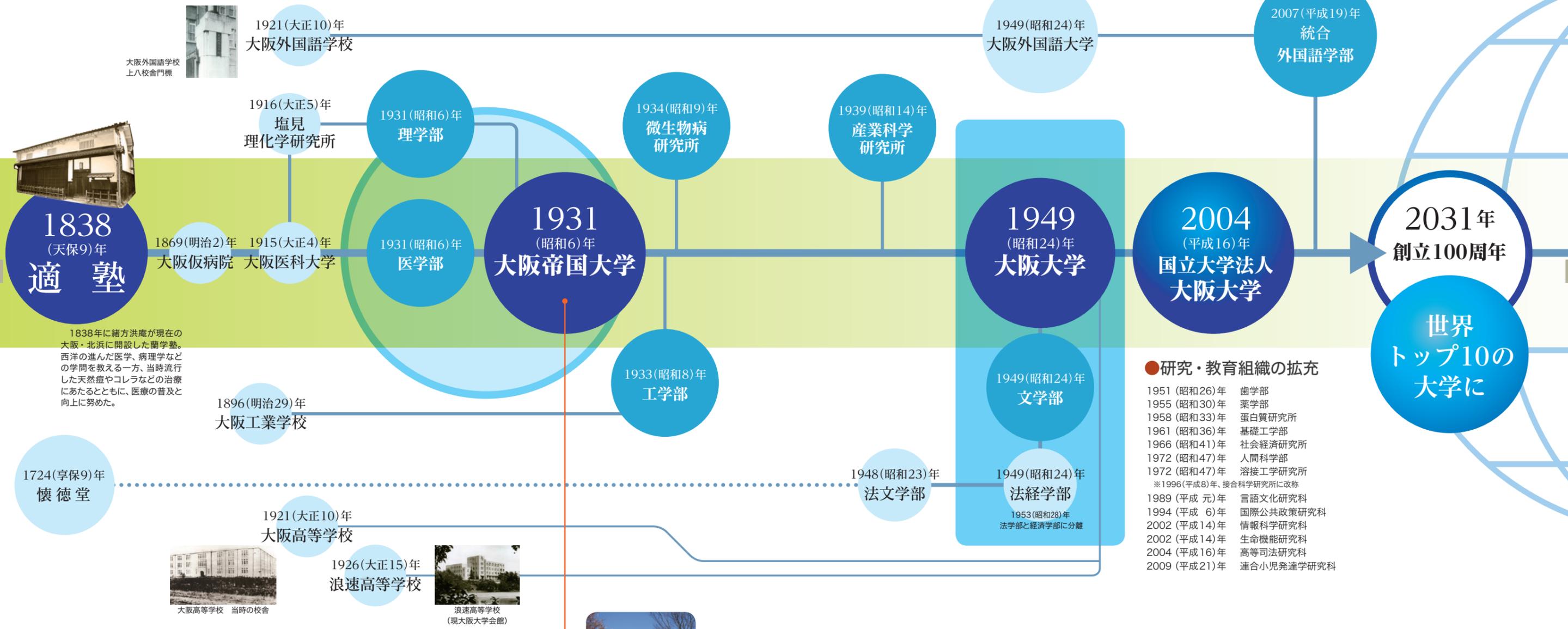


原点から未来へ

適塾を原点に、懐徳堂の精神も引き継ぐ—— 大阪大学の沿革



脈々と継承される理念

大阪帝国大学の創設

適塾の流れを汲む府立大阪医科大学を母体に、1931年に医学部と理学部からなる大阪帝国大学として設立された。「大阪にも帝国大学を」と、大阪の政官、経済界がこぞって国に強く働きかけ、市民や有志も設立のための寄付や支援を行い、設立に至ったという歴史をもつ。「地元大阪と市民の力によってつくられた大学」という特色を有している。初代総長の長岡半太郎は東大、京大をも凌ぐ大学を目指し、新進気鋭の俊英らを全国から集めた。のちに理学部に講師として迎えられた湯川秀樹もその一人。

糟粕ヲ嘗ムル勿レ

初代総長 長岡 半太郎(1931年)

科学と技術の融合により真の文化を創造する

第6代総長 正田 建次郎(1954年)

地域に生き世界に伸びる

第11代総長 山村 雄一(1979年)



長岡半太郎初代総長の像(吹田キャンパス)

大阪大学 歴代総長

- | | | | | | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 初代総長
長岡 半太郎
1931(昭和6)年 | 第2代総長
楠本 長三郎
1934(昭和9)年 | 第3代総長
真島 利行
1943(昭和18)年 | 第4代総長
八木 秀次
1946(昭和21)年 | 第5代総長
今村 荒男
1946(昭和21)年 | 第6代総長
正田 建次郎
1954(昭和29)年 | 第7代総長
赤堀 四郎
1960(昭和35)年 | 第8代総長
岡田 實
1966(昭和41)年 | 第9代総長
釜洞 醇太郎
1969(昭和44)年 |
| 第10代総長
若槻 哲雄
1975(昭和50)年 | 第11代総長
山村 雄一
1979(昭和54)年 | 第12代総長
熊谷 信昭
1985(昭和60)年 | 第13代総長
金森 順次郎
1991(平成3)年 | 第14代総長
岸本 忠三
1997(平成9)年 | 第15代総長
宮原 秀夫
2003(平成15)年 | 第16代総長
鷺田 清一
2007(平成19)年 | 第17代総長
平野 俊夫
2011(平成23)年 | |

適塾の教育



- ▶ 塾生の熱き志
自由な学問的気風
能動的な学び
- ▶ 基礎(=オランダ語)を固め
知識と視野を広げる

教育

大阪大学の教育

- ▶ 「物事の本質を見極める力」を身に付ける

大阪大学は、「物事の本質を見極める力」をもち、国際社会における複雑で困難な課題に果敢に挑み、解決へと導くグローバル・リーダーや、これまでに無いものを創造し、未来を切り拓く人の育成に全力で取り組んでいます。



物事の本質を見極め世界に羽ばたく

- ▶ 能動的な学びにより、「高度な専門性」を基盤に
それを社会で活かすための
「広い視野」と「豊かな教養」を育む

大阪大学は、各分野の専門教育により「高度な専門性」を育むことを基盤としながら、学部から大学院に至るまでの幅広い教養教育を通じて、「複眼的な視点」と「俯瞰的な視点」を養います。

学生の学びにおいては、自ら課題を設定し解決に向けて主体的に考える、能動的な学習態度を重視し、問題解決型学習、体験型学習、グループワーク、ディスカッション等の「アクティブラーニング」を積極的に展開しています。

また、世界へと視野を広げ、異文化を理解し世界の人々に対話できる「国際性」を養うため、学生に海外留学への積極的な挑戦を促すとともに、学内においても留学生と日本人学生が互いに切磋琢磨できる環境づくりに力を注いでいます。



Tekijuku

適塾門下生の特性

- ▶ 進取の気風と多様性
- ▶ 自由闊達な精神
- II 探究心の赴くままに



研究

OSAKA UNIVERSITY

大阪大学の研究

- ▶ 適塾から受け継ぐ先見性と自由闊達な精神により、時代を先取る独創的な学問・研究が行われています

■ 緒方洪庵の広めた種痘とコレラ対策



大阪種痘館分苗免状 虎狼痢治準

■ 近世後期の大阪では、天文学や医学など自然科学的な学問が発展

- 麻田剛立(1734—1799)
- 懐徳堂の門人である中井履軒(1732—1817)
- 洪庵の師である中天游(1783—1835)など

■ 薬の町・道修町



適塾から紡がれる進取の気風と自由闊達な精神

■ 大阪の医療を支える



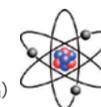
中之島時代の風景

■ 感染症研究の推進

- 微生物病研究所(1934) — ウイルス、ワクチン等の研究

■ 蛋白質研究の発展(戦後、栄養学的観点から)

- 量子力学分野を牽引
● 初代総長 長岡 半太郎(土星型原子モデルの提唱)



■ 産業を支える実学重視の気風も

- 産業科学研究所(1939)
- 「産学連携の祖」浅田 常三郎 教授

- 細胞融合の研究
- 先端医療(再生・移植医療等)
- 免疫学

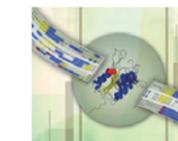
■ 創薬



- 材料科学
- 基礎工学部(1961・日本初)
- 認知脳システム学(ロボティクス)

■ 近代経済学

- 人間科学部(1972・日本初)
- 行動経済学/神経経済学
- 光量子科学



©JST ERATO Asada Project



適塾 特別対談

若者たちの「がむしゃらさ、全力投球」が新しい時代を拓く

▶2014年9月発行 大阪大学ニューズレター65号 掲載
適塾特別対談 安藤忠雄/平野俊夫より

平野俊夫

大阪大学総長

建築家

安藤忠雄

緒方洪庵が1838年に大阪・北浜に開いた「適塾」。その私塾から、福沢諭吉・大村益次郎・橋本左内など、「明治」を切り開いた有能な若者が育った。適塾が今の日本の基礎を作ったと言っても過言ではなく、我が国六番目の帝国大学として1931年に創設された大阪大学の原点でもあった。今回は、大阪を基盤に世界で活躍する建築家・安藤忠雄さんと平野俊夫総長が、大阪や関西の未来、世界適塾をめざす大阪大学の今後、若い人に伝えたいことなどを語り合った。

「独立自尊」の精神

平野 安藤先生は、幾度か適塾を訪れてくださっていると伺いました。私塾としての適塾、そして緒方洪庵にどのような印象を持っておられますか。

安藤 私は大阪生まれの大阪育ち。関一(せきはじめ/第7代大阪市長)が造った東西44町・南北約4町の御堂筋や、岡田信一郎の原案により建てられた中之島の中央公会堂などを見て、「大阪はすごい」と誇りに思っていました。この適塾も大阪人の誇りですね。江戸末期の期待と不安の入り交じった緊張感が、福沢諭吉などの若者を生み出したのでしょう。福沢諭吉の「独立自尊」の精神のように、自分で考えて自分なりに行動するという自立心を持った若者が時代を切り開いたのだと思います。

平野 それに対して、今の若い人たちをどう思われますか。

安藤 適塾の時代は、多くの人たちが新しい時代に対する好奇心を持ち、自分に何ができるかを考え続けていました。今も科学の世界を例にとれば、素粒子などのミクロの世界と宇宙などのマクロの世界の探求が同時進行するなど、好奇心のある人にとっては非常に面白い時代。江戸末期のような不安や緊張感は欠けていますが、次の時代を切り開くため、若い人たちは自分が何をすべきなのか考えないといけないと思います。

均一化された若者、思い切った転換を

平野 今の若い人たちも年金や医療など、将来や社会に対する不安を抱えていますね。

安藤 とても現実的な不安ですね。私の場合は、大学教育や建築の専門教育を受けられなかったことで自分の将来に不安があり、常に自分の立ち位置を見据えながら走らなといけなと考えてきました。若い人が不安を突破するには、まずは一心不乱に、倒れてもいっけな覚悟で勉強するしかないと思います。また、地球人口が70億人を超えた時代を生き抜くために必要なのは「創造する力」ですが、その創造力に対する緊張感が薄いように思います。一流大学に入ると将来は安定し順調にいくと、思っている傾向があるのではないですか。



大阪人には
自由な発想と壮大な構想力
そして「胆力」があった

●安藤忠雄(あんどう ただお)
1941年大阪生まれ。独学で建築を学び、69年安藤忠雄建築研究所を設立。イェール大、コロンビア大、ハーバード大の客員教授を歴任。97年東京大学教授に就任し、現在は東京大学名誉教授。代表作は「住吉の長屋」「六甲の集合住宅」「光の教会」「淡路夢舞台」「FABRICA(ベネトンアートスクール)」「アルマーニ・テアトロ」「ビューリッツァー美術館」「フォートワース現代美術館」「ホンプロイヒ/ランゲン美術館」など。79年に「住吉の長屋」で日本建築学会賞、89年フランス建築アカデミーゴールドメダル、95年プリツカー賞、97年王立英国建築家協会(RIBA)ゴールドメダル、2003年文化功労者、10年文化勲章など多数。

平野 緒方洪庵について司馬遼太郎は「多くの若い有能な人を育てたことが大きな功績だ」と著書に記しています。安藤先生も建築の世界で多くの若い人を育てておられますが、若い時には何が大切だと考えておられますか。
安藤 今の日本社会は固まっています。学歴社会で大企業社会、そして東京一極集中。さらに偏差値教育の影響などもあり、若い人たちの価値観は均一化されています。それを突破して新しい時代を拓くには、我々の時代よりハンディキャップがある。また生きることに對する一番のエネルギーは「自由」なのに、安定した将来の生活のために「不自由」を選んでいきます。そして全てがダウンサイジングの時代に入っているのに、親も未だに日本の右肩上がり時代のイメージに捕らわれています。思い切った方向転換が必要ですね。もう一つは、社会を読む力の前に「自分自身の能力を読む力」が重要だと思います。社会に対して自分が何をできるか。適塾で学んだ若者たちは「夢」を持っていました。夢は、建築家や芸術家だけではなく、医学者や教育者、サラリーマンも持つべきものだと思います。

自分の専門で勝負、全力で走れ

平野 非常に均一化された日本社会では、一つの固定観念から脱することが難しいということですね。安藤先生は若い時に世界へ飛び出しておられます。当時の海外経験に照らして、内向きとされる今の日本社会や若者を、どう感じていらっしゃいますか。
安藤 私は建築に関して、勉強の仕方から自分で学ばなければなりません。大阪・奈良・京都などにも優れた建造物がありますが、まずは世界を見たほうが良いのではないかと考えました。シベリア鉄道でヨーロッパに行き、貨客船でアフリカのケープタウンからマダガスカル島へ、さらにはインド洋をムンバイまで渡りました。赤道直下で見た星は言葉にならないほどきれいで、地球は本当に広いと感じました。それが、広い地球における自分の立ち位置を考える機会になったと思います。またその後、大阪の著名な財界人に強くサポートしていただく幸運に恵まれました。大切なのは、そのようなチャンスが来た時、いかにうまくキャッチするか。自分の専門分野について徹底的に勉強しておくことです。私には学歴はありませんでしたが、建築の話をするれば財界の人たちに納得してもらえたので、専門を徹底的にやれば良いのだと感じました。特に印象に残っ

ているのは、佐治敬三さん(元サントリー会長)とご一緒されていた小説家・開高健さんの言葉「全力で走れ。それしか君の生きる道はない」です。「全力で走れば摩擦も起きるが、解決する力を持っていれば、その走っている姿は青春だ」とも言われました。

人間力磨き、本気で闘う

平野 「全力で走れ」、いい言葉ですね。恐れを知らないのは若者の特性。私も医学部を卒業して国家試験を受けたわずか1年後に、免疫学を学ぶためアメリカに行きました。これをやりたいと思えば、やれる場所に飛び込んでいく。すると、今まで見たこともないような何かに出合えます。日本の均一社会に籠もっているのはダメ。世界は多様性に富んでいます。

日本の均一社会に
籠もっているのはダメ
世界は多様性に富んでいます

平野俊夫

言葉や文化・宗教などの多様性は、人間が心豊かに生活し発展するために必須ですが、一方でコミュニケーションの障害ともなり、対立や紛争が生まれます。そのネガティブな側面を乗り越える力を持っているのが学問。建築や芸術・スポーツなどと同じ人類共通言語ですから、言葉が通じなくてもコミュニケーションを持てます。学問を介して地球上に調和ある多様性を創造することも、大学の重要な役割だと思っています。安藤先生は常に多様な文化に接しておられ、異文化を乗り越えるため大変なこともあったかと思いますが、いかがですか。
安藤 あらゆる民族を越えて対話できるものは「心」しかなくて、その根底には世界中の人が求めている「自由」があります。しかし、今の日本人は安定に慣れて不自由に甘んじ、自由がないため、「心」による国際的な対話ができていません。また地球人としてどのように生き



刀傷の残る柱

るかという自分の立ち位置を考えているかどうか。私は建築の仕事を通じて、常に自分の立ち位置を確立しながら国際的な仕事をしたいと思ってきました。英語は話せませんが心で理解し合い、お互いの夢を建築という形にしてきました。まずは心、つまり人間を磨くこと。大学生には人間力を磨くための十分な時間があります。学生時代に本気で勉強などと闘わなかった人間は、生涯闘うことはないと思います。
平野 「今闘わなくて、いつ闘うのか」ですよね。それは20歳でも60歳でも同じです。また先ほどから立ち位置が大事と言っておられますが、安藤先生の立ち位置ともいえる大阪に對する思いを教えてくださいませんか。
安藤 御堂筋の拡張工事などを見てもわかる

ように、大阪人というのは自由な発想と壮大な構想力を持っていたと思います。そして自分に訪れたチャンスを受け止めるためには「胆力」が必要。大阪で私塾を開いた緒方洪庵にも、新しい時代に自分が何をしないといけないかを考えて全力で走るといふ相当な胆力があつたと思います。

**可能性は自分の中にある
自分で突破を**

平野 東京一極集中に対する関西の強みとして、狭いエリアに大阪・京都・奈良・神戸があり、多様な文化・歴史を持っていることだと思います。そして大阪は、懐徳堂や適塾があつたように昔から好奇心が旺盛で、私塾を支える風土をもちます。また、関西には多様で面白い大学が多くあり、未来に対するポテンシャルも大きい。弱点は、大学間で連携がヘタ

なこと。大学も企業も連携することによって、関西がリーダーシップを取っていく一つのキープポイントにつながる気がします。
安藤 地球レベルで自分たちがやろうとしていることは何か。それをしっかり踏まえた連携をしたうえで、競争もしないといけない。日本の教育のあり方を徹底的に考え直すべき時期だと思います。それに適塾では、みんなが夢を持ち、蘭学の本1冊で勉強していたわけでしょう。福沢諭吉のような独立自尊の精神のない学生、成績の良くない学生は卒業させない、といったシステムも本気で考えたほうがいいと思いますが(笑)。
平野 私は学生に「夢は叶えるためにある」と言っています。実現が難しいからこそ夢なのですが、夢を別世界の話と思うと永遠に夢です。

学生時代に本気で勉強などと
闘わなかった人間は
生涯闘うことはないと思います

安藤忠雄

夢に向かって目の前のことを着実にやるのが重要です。安藤先生、最後に大阪大学や阪大生、若い人にメッセージをお願いします。
安藤 可能性は自分の中にあります。自分自身で探してほしい。自分の可能性を追求すると社会ではぶつかることが多いですが、適塾の時代のように、それを突破して行ってほしい。面白い人生というのは、自分が納得できる人生だと思います。また国力というのは、経済力だけではありません。今の日本にはない「世界から尊敬される力」が、学問の世界から出てきてほしいですね。
平野 若い人は夢を持って「今」という時間に全力投球し、夢を叶えるために目の前の山を一つ一つ登りきってほしい。我々も大阪大学の適塾から世界適塾へ、そして世界トップ10の大学をめざすという夢を叶えたいと思います。今日はありがとうございました。